小 学 校

平 成 5 年 度

教育研究員研究報告書

国　　語

東京都教育委員会

平成５年度

教育研究員名簿

低学年分科会	江東	第二大島小	渡辺哲郎
	大田	入新井第一小	矢部チヤ
	大田	池上小	小田容弘
	荒川	第七峡田小	鈴木正美
	板橋	向原小	田山幸子
	足立	舎人第一小	◆中村弘子
	葛飾	柴又小	◇篠原和子
	葛飾	白鳥小	熊澤喜子
	八王子	中山小	長谷川典子
	調布	柏野小	上原智子
	保谷	東伏見小	高見博子

中学年A分科会	墨田	錦糸小	町山理恵子
	北	桜田小	南克子
	板橋	北前野小	◇加藤順子
	練馬	開進第三小	高井信子
	足立	千寿第四小	◆桑原けい子
	江戸川	平井第二小	荒井千瑳子

◎全体世話人　◆全体記録

○全体副世話人　◇分科会世話人

中学年B分科会	新宿	四谷第四小	◇高倉和子
	世田谷	玉堤小	青木由美子
	中野	多田小	三上はるひ
	練馬	開進第一小	林嘉瑞子
	武蔵野	関前南小	鈴木幸子
	町田	忠生第四小	鈴木潔
	羽村	富士見小	◆中島武史

高学年A分科会	八王子	松枝小	佐藤敏夫
	府中	府中第六小	◇脇坂ひとみ
	小平	小平第五小	後藤純子
	日野	日野第三小	○前田佐和子
	東村山	秋津東小	宮津大蔵
	国分寺	第四小	笹河悦郎

高学年B分科会	文京	真砂小	◎畑中秀夫
	品川	大間窪小	神屋敷節子
	世田谷	八幡小	西郷ヨシ江
	杉並	四宮小	◇林真由美
	江戸川	篠崎第三小	清水雅也

担当課長　小島　宏　教育庁指導部初等教育指導課

担当指導主事　坂東文昭　教育庁指導部初等教育指導課

目　次

Ⅰ　共通研究主題　　主体的な読み手を育てる指導法の研究…… 2
―― 文学的文章の読みを通して ――
1　共通研究主題設定の理由…… 2
(1)　主体的に言葉とかかわる児童を育てる…… 2
(2)　言葉に心を通わせる児童を育てる…… 2
2　共通研究主題に対する基本的な考え方…… 3
(1)　「主体的な読み手」と目指す児童像…… 3
(2)　研究の内容と方法…… 3
(3)　研究の全体構造図…… 4
Ⅱ　研究の内容…… 5
1　教師の指導観と児童の学習観の転換…… 5
2　内発的な学習意欲を生かす単元構成の工夫…… 6
3　児童理解の工夫と評価の生かし方…… 7
Ⅲ　実践事例…… 9
1　楽しく読み合うための学習活動の工夫…… 9
単元名「楽しい音読発表会をしよう」第１学年
2　一人一人が表現する活動を通して，生き生きと読み進める学習活動の工夫…… 12
単元名「絵本を作ろう」第３学年
3　一人一人がめあてをもって読み進め，自分の考えを広げる学習活動の工夫…… 15
単元名「わたしの『一つの花』ノートを作って友達と読み合おう」第４学年
4　一人一人がめあてをもって読み進め，自分の考えを深める学習活動の工夫…… 18
単元名「○○小学校に朗読カセットブックを送ろう」第５学年
5　一人一人が作品に自らかかわって読み進める学習活動の工夫…… 21
単元名「夢はどのようにえがかれるのか」第６学年
Ⅳ　研究の成果と今後の課題…… 24

〈要約〉本研究は，教師の指導観と児童の学習観の転換を図ることを基盤として，主体的な読み手を育てるための教師の支援の在り方について実践，考察したものである。

Ⅰ　共通研究主題　　主体的な読み手を育てる指導法の研究

――文学的文章の読みを通して――

1　共通研究主題設定の理由

人間にとって，読む，書く，聞く，話すという言語活動は，社会生活を営み文化を創造していく上で，欠かすことのできない活動である。このことは，言い換えれば，次代を担う児童が社会の変化に対応し心豊かに生きていくために，言語能力を身に付けることがいかに重要であるかを示している。

しかし，今日の科学技術の進展は多様な情報手段を開発し，人間と言語とのかかわりに様々な影響を及ぼしている。特に，言語による伝達機能の低下は，児童の行動様式においても，言葉を聞き流したり，単語だけで会話をしたり，言葉で表現する前に行動が先行したりするような傾向を生じさせている。

これからの国語科教育においては，こうした言語能力が身に付きにくい状況を改善し，児童が主体的に言葉とかかわり，言葉に心を通わせながら豊かに生きていく力を育てることが重要であると考え，本主題を設定した。

(1)　主体的に言葉とかかわる児童を育てる

読書に対する児童の意識を調べると，本は好きだが授業で読むのは嫌いと答える児童がいる。このことは，国語科の読みの学習が，一斉指導の場面で文章を細かく正確に理解することに比重をかけすぎ，本来，児童が求めている読みの楽しさを阻害しているのではないかとも考えられる。そこで，映像文化の中で若者の読書離れが進む現状とも考え合わせ，主体的に言葉にかかわる児童を，私たちは文学的文章の読みの学習指導を通して育成したいと考えた。そのためには，文学的文章の読みにおいて，児童が読みの楽しさを実感しながら言葉とかかわり，確かな言葉の力を身に付けることができる授業を創造していくことが大切である。

(2)　言葉に心を通わせる児童を育てる

文学的文章の読みの特性を踏まえ，次のような学習場面を数多く展開する必要がある。

①　登場人物に対する共感，反発，葛藤などを通して，人間に対する見方や考え方を深める。

②　登場人物に気持ちや場面の様子を読み取ることにより，思考力や想像力などを育てる。

③　優れた表現に出会うことで，日本語のもつ美しさに気付き，言葉に対する感性を磨く。

④　一人一人の読みを表現し合うことにより，虚構の世界に浸って読む楽しさを体験する。

文学性の高い作品ほどこうした特性を多く含んでおり，児童は作品の一つ一つの言葉に心を通わせながら読みを深め，心を豊かにしていくものと思われる。

2　共通研究主題に対する基本的な考え方

(1)　「主体的な読み手」と目指す児童像

「主体的」とは，新しい課題や困難に直面したときに，自らの考えや判断に基づきながら，その課題や困難に立ち向かっていく能動的な生き方である。それを支える基礎的な能力は，思考力，判断力，表現力などであり，自ら学んでいこうとする意欲や態度である。

このことから，「主体的な読み手」とは，語句や文章に即して思考力，想像力，表現力などを働かせながら，自分とのかかわりにおいて読むことのできる読み手であると考える。文学的文章を読む場合，作者の描くフィクション（虚構）の世界に入り込み，登場人物に同化したり，自己と対比したり，想像したりして作品を豊かに読み取り，文章表現を巧みさを味わうことができる読み手である。したがって，このような主体的な読み手を育てるには，既有の学習経験を生かし，自分の力で課題を解決したり読み進めたりできる自己教育力の育成が大切である。

主体的な読み手を目指す児童像を次の５点から設定し，それぞれの児童像を実現するための指導の手立てを明らかにすることに努めた。

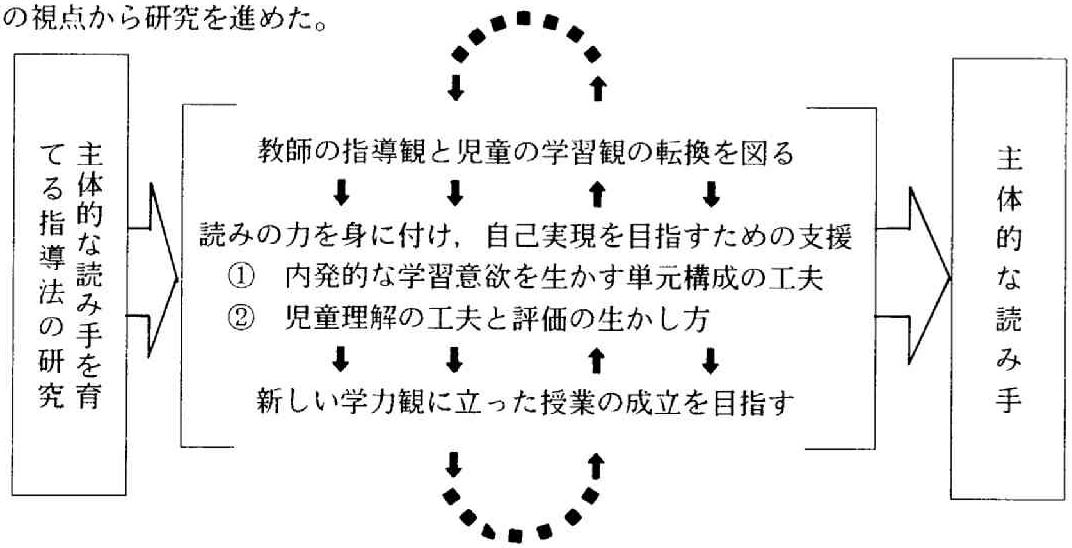
〔指導の手立て〕

○めあてをもって読み進める児童……
○言葉を手がかりに想像豊かに読む児童……
○自分の読みを表現する児童……
○友達の読みと比べ自分の読みを豊かにする児童…
○学び方が身に付いている児童……

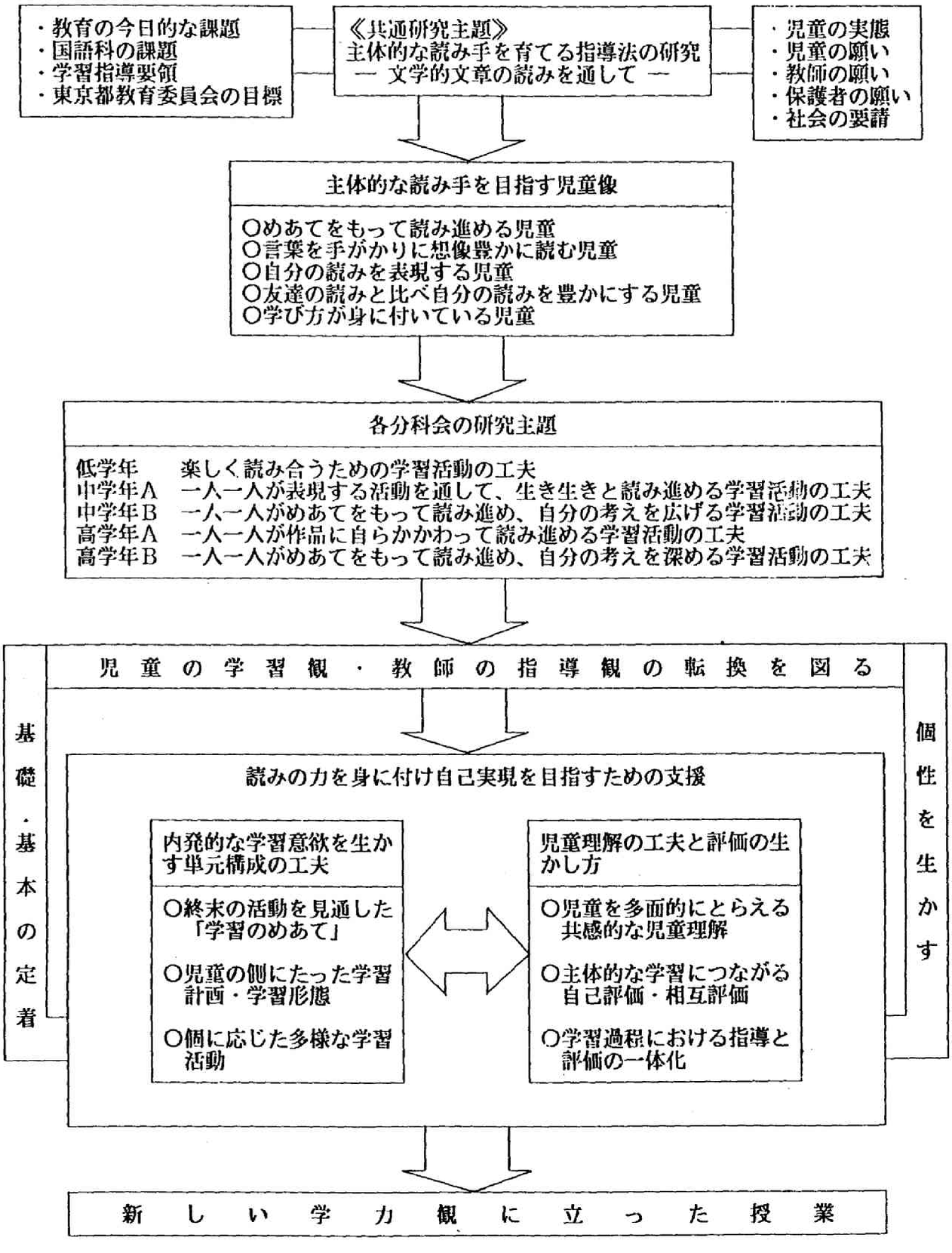
・内発的な学習意欲を高める。
・文学的文章の特性を味わうことができるようにする。
・学習の仕方が身に付くようにする。

(2)　研究の内容と方法

文学的文章の読みを通して主体的な読み手を育成するために，五つの分科会を組織し，下記の視点から研究を進めた。



(3) 研究の全体構造図


・教育の今日的な課題
・国語科の課題
・学習指導要領
・東京都教育委員会の目標
《共通研究主題》
主体的な読み手を育てる指導法の研究
― 文学的文章の読みを通して ―
・児童の実態
・児童の願い
・教師の願い
・保護者の願い
・社会の要請
主体的な読み手を目指す児童像
○めあてをもって読み進める児童
○言葉を手がかりに想像豊かに読む児童
○自分の読みを表現する児童
○友達の読みと比べ自分の読みを豊かにする児童
○学び方が身に付いている児童
各分科会の研究主題
低学年　楽しく読み合うための学習活動の工夫
中学年A　一人一人が表現する活動を通して、生き生きと読み進める学習活動の工夫
中学年B　一人一人がめあてをもって読み進め、自分の考えを広げる学習活動の工夫
高学年A　一人一人が作品に自らかかわって読み進める学習活動の工夫
高学年B　一人一人がめあてをもって読み進め、自分の考えを深める学習活動の工夫
基礎・基本の定着
児童の学習観・教師の指導観の転換を図る
個性を生かす
読みの力を身に付け自己実現を目指すための支援
内発的な学習意欲を生かす単元構成の工夫
○終末の活動を見通した「学習のめあて」
○児童の側にたった学習計画・学習形態
○個に応じた多様な学習活動
児童理解の工夫と評価の生かし方
○児童を多面的にとらえる共感的な児童理解
○主体的な学習につながる自己評価・相互評価
○学習過程における指導と評価の一体化
新しい学力観に立った授業

Ⅱ　研究の内容

社会の変化に主体的に対応できる心豊かな人間を育成するに当たっては，これまでの知識や技能の習得に偏った学習指導から，新しい学力観に立ち，児童一人一人の自己実現を支援する学習指導へと改善を図る必要がある。

そのために，国語科においては，児童一人一人が言語に対する興味や関心をもち，進んで教材とかかわるなかで，自ら考えたり判断したり表現したりする資質や能力を育てることが重要である。また，その過程において，言語にかかわる基礎的・基本的な知識や技能をしっかりと身に付けることが，一人一人のよさや可能性を更に発揮させるものであるととらえ，学習指導を展開することが大切である。

国語科の学習指導の現状を，こうした児童の側に立つ教育の視点から見直したとき，学習に対する児童の主体性や教師の支援の在り方などについて改善すべき課題も多く見られる。そこで，文学的文章の読みの学習指導を取り上げ，児童一人一人が主体的な学び手として豊かな自己実現を図っていくための支援の在り方を追究することにした。

この課題を達成するために，教師の指導観及び児童の学習観の転換を図ることを基盤とし，①内発的な学習意欲を生かす単元構成の工夫　②児童理解の工夫と評価の生かし方　の二つの視点を設定した。

1　教師の指導観と児童の学習観の転換

新しい学力観に立つ学習指導を構想するに当たっては，これまでの授業に対する教師自身の指導観や児童の学習観を見直すところから始める必要がある。そして，この両者は相互に影響し合い，相乗的に転換を促すものであるとの考え方に立ち，授業を構成することにした。

6学年の研究実践のなかで，次のような学習感想を書いた児童がいる。「今日の話し合いはとても充実していた。自分一人で読んでいた時は分からなかったことがいろいろ分かった。K君の出した『なんであんな夢をみたんだろう？』ということは，私はちっとも気づかない問題だったので，ちょっと感心した。この夢でヒトシ（主人公）は自分をちょっとだけ客観的に見つめているように思う。…（後略）」「Ｉ君がみんなに質問した問題が，ぼくにはよく分からなかったので，もうちょっと読んでから，また話し合いたい。」

前者は，読みの交流を通して自分の読みが広がり深まったことに喜びを見出し，後者は，友達によって気付かされた新たな学習課題を，もう一度作品を読み直すことで解決しようとしている。ここには，児童の思いや願いを実現するための働きかけのすべてを支援ととらえる教師の指導観のもとに，集団の中で個の学習を充実させている児童の主体的な姿が見られる。

2　内発的な学習意欲を生かす単元構成の工夫

(1)　終末の活動を見通した「学習のめあて」

一人一人が主体的に読み進めていくために，「こんな学習をしたい」という児童自身の思いや願いを取り上げ，終末の活動として明確にイメージさせることが大切である。

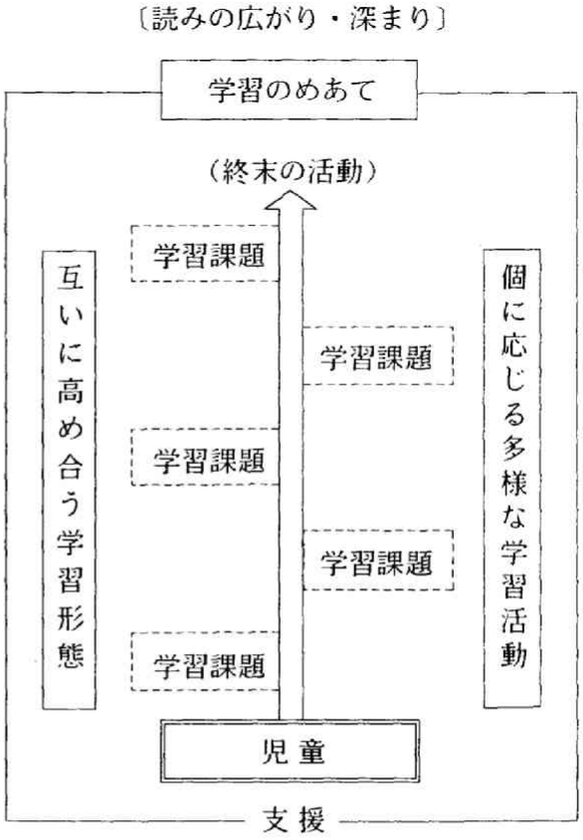
そこで，本研究では，児童がイメージとしてもった終末の活動を「学習のめあて」とする。児童は，自分の学習に対する思いや願いが「学習のめあて」として具体化されることで，作品に対する興味や関心を一層強め，意欲的に読んだり，話し合ったり，書いたりして個の読みを広げ，深めることができる。そして，こうした学習活動を通して，児童一人一人がよさや可能性を発揮しながら，新しい学力観に立つ学力を自らの力で獲得していくことが可能になるであろうと考えた。

「学習のめあて」は，「絵本を作ろう」というように具体的な活動が前面に出てくるものから「戦争と人間について考える」というように，作品の主題に正面から立ち向かうようなものまで考えられる。教師は，これまで以上にこうした児童の願いを大切に受け止め，児童自身が作品に合った適切な「学習のめあて」をもてるようになるまで見守ることが必要である。

(2)　児童の側に立った学習計画・学習形態

児童一人一人は，異なる知識，経験，能力を背景とし，様々な興味・関心をもって作品を読むことから，それぞれが固有の読みをもっているものと考えられる。また，その読みは，集団の中の読みの交流によって，様々な刺激を受け，毎時間変容していく。

その過程において，一人一人が解決したいと考える問題や，児童の主体性を大切にしながらも，読みの力を身に付けさせるために教師が児童に考えさせたい問題も出てくるものと思われる。本研究では，こうした問題を「学習課題」として位置付け，終末の「学習のめあて」を達成するために有効に機能するような設定の仕方が必要であると考えた。そして，児童が「学習課題」を解決することに強い必要感をもち，学ぶ喜びを見出したとき，主体的な読み手が育つものと考えた。



そのためには，児童一人一人の読みの深まりや広がりに対応できる弾力的な学習計画や学習形態を工夫することが必要である。本研究では，児童が教師と一緒に学習計画を立てる段階から，その経験を生かし，最終的に児童が自らの力で学習計画を立てられるようになる段階まで6年間を見通した学習計画の作成の仕方を工夫することにした。

また，学習形態についても，教師が一方的に指示する場面をなるべく少なくし，児童が学習活動に応じて適切に選択できるような方法を工夫することが必要である。低学年の段階から，自分の読みをよりよくしていくために学習形態を変えるという意識を児童自身にもたせていくことは，学び方を学ばせるという観点からも極めて重要なことであると考える。

(3) 個に応じた多様な学習活動

自らの思いや願い，興味・関心に基づいて設定した「学習のめあて」や「学習課題」にかかわって，児童が主体的な学習を展開するためには，個に応じた指導を基本において，そこで獲得した個の読みが全体の場で更に充実するような学習指導を工夫する必要がある。

そのためには，児童一人一人が個の読みを表出するための方法を数多く身に付けていることが前提となる。このような考え方から，学年の段階に応じて，児童が様々な学習活動を学習の方法として身に付けられるようにするために，次のような系統を考えた。

低学年＝教師と一緒になって，数多くの学習活動を体験する。 中学年＝いくつかの学習活動の中から，自分に合った方法を選ぶ体験をする。 高学年＝身に付けた学習活動を自ら応用する体験をする。

3 児童理解の工夫と評価の生かし方

(1) 児童を多面的にとらえる共感的な児童理解

児童は，本来，より向上したい，よりよく生きたいという強い意志や願望をもっている。支援の要諦は，まず教師がこうした肯定的な児童観に立つことであり，一人一人がもつよさや可能性を見出し，より豊かに伸長させることである。

評価活動においても同様に，教師が児童の側に立って共感的に理解することにより，児童は自分の存在に自信をもち，自分を表現することに大きな喜びを感じるものと思われる。そこで，次のような基本姿勢のもとに学習指導を展開することにした。

○ 知識や技能面だけを重視することなく，言語に対する関心・意欲・態度についても日常の生活場面から幅広くとらえておくようにする。

○ 児童の発表や作品などを継続的に評価し，学習の過程で変化していく児童の読みを成長の一つととらえ，決して固定的にとらえないようにする。

(2) 主体的な学習につながる自己評価・相互評価

児童が生涯にわたって主体的な読み手としての学習態度を確立するためには，自己評価力の育成が不可欠であると考える。そこで，学年の発達段階や学習内容に合わせて，カードを活用したり，自分の読みを見つめ直す感想を書かせたりするなど，自己評価の方法を多様に工夫することにした。教師がその自己評価の結果を1時間ごとに目を通し，一人一人の読みや学習の状況を読み取り，個に応じた支援や授業改善に役立てることにより，児童は自らの学習を振り返り，見通しを持って次の学習に臨むようになってきている。

また，学ぶ意欲を喚起するものとして，相互評価が大きな役割を果たすものと考える。授業の中に相互評価の場面を適切に位置付けることにより，「A君の考えは，ぼくの気づかなかった素晴らしい考えだ」と友達から触発されたり，読みの交流の中で「友達が私の考えを聞いてくれた」など友達から認められた喜びが聞かれたりするようになってきた。こうした何でも言い合える学級の雰囲気を醸成することも，主体的な読み手を育てる要件としてとらえる必要がある。

(3) 学習過程における指導と評価の一体化

児童一人一人の読みを的確にとらえ，それに対応した支援をするためには，学習の過程における評価を工夫し，指導に生かしていくことが大切である。

本研究では，特に継続的な評価活動を重視し，前時までの児童の学習内容が本時に生かされるような方法を工夫した結果，学習指導案のほかに下記のような「個に応じた支援計画」を作成し，それを本時に活用する実践が多く見られた。

A　子	B　子
①ハリネズミたちが言っている言葉を，気持ちが表われるように読む。 ②読み取りがやや表面的になるので，対話しながら，気持ちを深く想像させるようにする。	①ジャックじいさんとハリネズミの気持ちを想像しながら読む。 ②めあてからそれずに読み進めるように助言する。
E　男	**F　男**
①人間のことをおっかないと言っている意味を知りたい。 ②言葉のとらえ方が辞書的意味を理解したところで立ち止まってしまう。想像することの大切さをわからせたい。	①ハリネズミとジャックじいさんの会話を考えて読む。 ②表現活動への意欲が高まってきている。朗読の工夫をする中で，さらに深い読みになっていくようにさせたい。

C　子	D　男
①ハリネズミとジャックじいさんの明かりについての考えを読みとる。 ②朗読は大変意欲的である。表現の工夫をするときに，根拠となる読みをさせていきたい。	①ハリネズミが月や星に対してどういう気持ちをもっているのかを読み取る。 ②真面目である。思考が一面的になりやすいので，豊かに深く読み取れるようにさせたい。

個に応じた支援計画	氏　名
	①本時の個のめあて ②児童の学習状況と支援

Ⅲ　実践事例

1　楽しく読み合うための学習活動の工夫（第１学年）

(1)　単元名　「楽しい音読発表会をしよう」

(2)　教材名　おじさんのかさ

(3)　研究主題との関連

本教材は，全文がリズム感に満ちていて，音読に適している。音読の楽しさを感じ始めている１年生にとって，グループで工夫して「楽しい音読発表会にしよう」という本単元は，児童の意欲を喚起させた。児童が大好きな音読の機能を積極的に取り入れることにより，授業改善のきっかけをつかむことができた。

楽しく読み合うためには，教師の適切な支援が重要である。児童を多面的にとらえ共感的な児童理解に努めた。特に，音読や話し合いにおいては，すぐその場で伸びた点やよい所を評価し，大いに認めることでよりよい方向へ変容していった。一斉の場における支援や個別の支援を即時に，あるいは適時に行うことにより，児童の学習意欲が高まった。

(4)　学習計画の概要（全12時間　本時８／12）

学　習　活　動	楽しく読み合うための支援
○全文を読み，やってみたいことやおもしろかったことなどを書く。 ○どんな音読発表会にしたいかを話し合い，めあてを持つ。	・最後まで自分の力で読むように励ます。 ・少しでも書くことができたらほめる。 ・音読発表会のイメージを一人一人が持つことができるように話したり，ビデオを観たりする。
楽しい音読発表会をしよう。	
	・いつ，誰に観せたいのかを明確にする。
○おじさんの気持ちを想像して動作化したり吹き出しに書いたりする。 ○おじさんの気持ちが表れるように音読する。 ○グループで工夫して音読の練習をする。	・大切な言葉や文に着目して発言できたら大いに認める。 ・よい所や，伸びた所を認め励ます。 ・グループで励まし合いながら分担読みをしたり役割読みをする。 ・音読のめあてを言ってから音読をする。
○楽しい音読発表会に向けて招待状を書いたり，グループで音読の練習をする。 ○楽しい音読発表会をする。	・特に自分のがんばった所を書くよう助言する。 ・他のグループの工夫している点や，よい所に気付くように助言する。

(5) 展開（8／12）

① 目標

・ 雨の中に入っていったおじさんの気持ちを読み取る。

・ おじさんの気持ちを想像して吹き出しに書いたり，うれしい気持ちが表れるように音読したりする。

② 展開

学　習　活　動	楽しく読み合うための支援（○）と評価（●）
1．前時の学習を想起する。	○おじさんの会話文を工夫したり，動作化したりする。
2．本時の学習範囲を確かめる。	○「楽しい音読発表会をしよう」のめあてを確認し意欲を高めるよう助言をする。
3．おじさんの気持ちを考えながら，微音読をする。	○「上からも下からも」の所を学習課題にしている児童を紹介する。
4．指名読みを聞いて，おじさんの気持ちが表れるように音読できたところを発表し，話し合う。	●友達の音読を聞いて，よい所を見つけることができたか。
5．おじさんの気持ちを考えて，吹き出しに書き，発表する。	○あまり書くことができない児童には，助言をしたり，初めの部分を書いたりする。 ○早く書き終えた児童は，5回以上吹き出しを小さな声で読む練習をするように伝える。 ●雨の音を楽しんでいるおじさんの気持ちを吹き出しに書くことができたか。
6．グループで工夫して音読する。	○グループ練習の中で，友達を励ましたり，自分達でもっと工夫をしようとする発言が見られたら大いにほめる。 ●友達の発表を聞いて，よい所を見つけることができたか。
7．自己評価をする。	○一人一人の伸びた所を認める。

(6) 考察

① 内発的な学習意欲を生かす単元構成の工夫

学習のめあて　本単元の学習のめあては,「楽しい音読発表会をしよう」である。1年生の発達段階と，児童の願いと教材の特性とを考慮した。児童の大好きな活動である音読を積極的に取り入れたので，学習意欲が高まり，音読カードによる練習も熱心に取り組んでいた。また,誰に,いつ，どのような所で音読発表会を行うのか話し合うことよよって，一人一人のめあてのイメージを明確にした。これは児童の意欲を持続させる上で有効であった。

学習計画　児童の側に立った学習計画を立てるようにした。児童の意識の流れを大切にしながら，叙述に即して楽しく読み合うことができる学習計画にした。毎時間，学習のめあてとの関連を明確に示すことで，読み取ったことが音読に表れるようになってきた。音読を，毎時間効果的に取り入れ読み深める学習が楽しくできたので，めあての意識も高まっていった。

② 児童理解の工夫と評価の生かし方

共感的な児童理解　児童一人一人を認め，共感的に愛情をもって受け止めることが大切である。しかし，毎時間，全ての児童に適切な支援をすることは困難である。そこで，個に対する支援を適切に行うために，座席表を活用した個に応じた支援計画を作成し，指導に役立てた。ワークシートの評価も，よく読み取っていることやその子なりに伸びている点などを赤ペンで児童に分かりやすく記述し掲示することで友達のよい所を見つけ合うことができた。また音読や発表の後で，友達のよい面を見つけ合い，児童相互でも支援し合うことは自分の読みを高めるのに有効であった。単元全体の中で，どの児童も認められる喜びや満足感が得られるように個に応じた支援案を活用した。

効果的な即時の支援　特に低学年においては，教師がすぐに認め評価することによって学習意欲を大いに高めることができた。「この子のここがよい。」と具体的な評価のポイントをその場で示すことが，児童の意欲付けに効果的であることが分かった。音読や話し合いにおいても，教師が即時に支援することによって，友達のよさに気付いたり，読みの力を確かなものにしたりすることができた。本単元では，おじさんがとうとうかさを開いてしまったのは，二人の子供が元気よく歌った歌につられたからである。歌の所を楽しそうに節をつけて元気よく音読できた児童を教師がすぐにほめることで，他の児童も，おじさんの気持ちの変化に気付いたり，どのように歌ったらよいのかを工夫したりするようになった。話し合いや表現活動での教師の助言は，発表した児童に対する個別の支援であると同時に，クラス全体の一斉の場における重要な支援でもあることが実践を通して分かった。

2　一人一人が表現する活動を通して，生き生きと読み進める学習活動の工夫（第３学年）

(1)　単元名　「絵本を作ろう」

(2)　教材名　サーカスのライオン

(3)　研究主題との関連

本教材は，サーカスの持つ独特の雰囲気が児童の空想力を刺激し，随所に見られる擬音，擬態語や比喩表現が更に想像力を高めさせる作品である。私たちは，児童が本教材と出会った時，主人公じんざの行動を絵にしたい欲求が自然に涌いてくるのではないかと考えた。そして，本学級の実態から見て，絵本という一つの作品の完成を目指すことが，児童の意欲の継続や成就感につながるものと考え，単元全体のめあてを，「絵本を作ろう」と設定した。

また，様々な表現活動を通して主体的に読み，読み取った内容を友達と交流し合うことで更に，個の読みを深めることができるものと考え，本単元においては，場面に応じて幾つかの表現活動を共通に体験することとした。これは，こうした体験を積み重ねるなかで児童が自分に合った学習方法を選んでいけるようにするための一つのステップであると考える。

さらに，児童一人一人を共感的に理解し，児童の豊かな自己実現を支援していくための評価の生かし方として『個に応じた支援計画』『支援と評価を明記した学習指導案』『自己評価・相互評価の工夫』の視点から改善を図ることにした。

(4)　学習計画の概要（全12時間・本時10／12）

学　習　活　動	表現する活動を通して，生き生きと読み進めるための支援
○初発の感想を発表し合い，学習のめあてをもつ。 ○学習計画を立てる。　絵本を作ろう。	・終末の活動をイメージできるようにする。 ・単元全体を見通せるような学習計画カードを工夫する。
○場面ごとに，じんざやおじさん、男の子の気持ちを想像したり，気持ちの変化を読み取る。 ○男の子を救い出す場面の緊迫したじんざの行動を読み取る。	・場面に合ったいろいろな表現方法を取り入れる。 ☆サイドライン　☆吹き出し　☆話し合い　☆手紙 ☆音読（人物の気持ちや場面の情景を想像しながら工夫して読む）等。 ・吹き出しや手紙などの学習記録を絵本としてとじ合わせることにより児童の成就感を大事にする。
○完成した絵本を読み合う。 ○あとがきを書く。	・楽しい雰囲気を作り出し作品を読み合う場を設定する。

(5) 展開（10／12）

① 目標

・ 男の子を救い出す場面の緊迫したじんざの行動を読み取る。

・ じんざの行動から男の子に対する思いを読み深め，吹き出しに書いたり音読したりする。

② 展開

学　習　活　動	生き生きと読み進めるための支援(○)と評価(●)
1．前時までの学習を想起する。 2．本時のめあてをつかむ。 ウォーッとほえたときのじんざの気持ちを考えよう。 3．学習範囲を読む。	○声に出して読み，意識付ける。
4．火事の様子を詳しく表している言葉，じんざの気持ちが分かる言葉にサイドラインを引く。 5．ラインを引いた言葉を発表する。 6．様子を詳しく表している言葉に気を付けて音読する。 7．『ウォーッ』と力の限りほえたじんざの気持ちを想像して，吹き出しに書く。	●手がかりとなる言葉に着目して，サイドラインを引くことができたか。 ○言葉に着目できない児童や，なかなかラインが引けない児童には助言する。 ○言葉に着目している児童は，発表できるように励ます。 ○本文の叙述の順序に板書し，場面の状況のイメージを明確にする。 ○話し合ったことを生かして，班で協力して音読するよう助言する。 ●気持ちや場面の状況を想像して音読できたか。 ○ペープサートを使って，『ウォーッ』を声に出して読んでみるようにする。 ●気持ちを想像して吹き出しに書けたか。
8．吹き出しに書いたことを発表する。 9．気持ちをこめて音読する。 10．自己評価をする。	○自信を持って発表できる雰囲気をつくる。 ○工夫して読んでいるところを大いにほめる。 ○次の時間への意欲につなげるようにする。

(6) 考察

① 内発的な学習意欲を生かす単元構成の工夫

学習のめあて　単元全体のめあて「絵本を作ろう」は，児童自らの興味・関心に基づくものであり，絵本の完成という楽しい終末の活動のイメージと，それまでの具体的な活動の見通しを持ちやすいため，学習意欲を継続させるうえで有効であった。また，毎時間ごとの読みのめあてを書いた学習計画カードも，学習に見通しを与え，児童はそれにより目的を持って読み進めることができた。

また，めあてが全員のものとなるには，児童一人一人の読み取りが大切であると考え，通読後2時間続きの時間を設定し，教材をじっくり読む時間を保障した。そのことにより主題に迫る感想を持つことができ，毎時間ごとの学習のめあてを考えるうえで，効果があった。

表現活動　個の読みを深め，広げるために多様な表現活動を経験させることが必要であると考え，教材や学習過程にふさわしい表現方法を選んで活動させた。本時では，音読と吹き出しを取り上げた。音読は理解を深めるものとして，多くの場面で設定したが，それぞれの音読のねらいをより明確にする必要があった。吹き出しは，登場人物になり切り，言葉を大事にして，思考力や想像力を働かせながら文章を読む力を付けるための有効な方法であった。

② 児童理解の工夫と評価の生かし方

支援計画としての座席表　指導に生かす評価とするために，学習内容をどの程度理解できたか，どのような思考で学習を進めているかなどを教師が理解している必要がある。そこで，事前に実態調査を行い，一人一人が現在持っている読みの力を把握した。次に，この結果を基に本単元の学習で付けさせたい読みの力を洗い出し，個々の支援計画を立てた。これらを座席表にまとめていく過程で，支援の内容をより明確にすることができた。指導の補助的な資料としての座席表の作成及び活用は児童を理解するうえで非常に有効であると実感した。

自己評価・相互評価の工夫　自己評価は，関心・意欲・態度のような内面的働きをとらえるうえで大切であり，また，自己教育力の育成につながるものである。そこで本単元では『毎時間，学習のめあてに対して，3段階で評価する』『吹き出しや手紙を書いた画用紙の一部分に，その時間の感想を書く』という方法を試みた。これらの活動は，児童自身がその時間の学習を振り返るだけでなく，次時への意欲付けにもなった。また，相互評価は，友達のよさを認め自分の読みに生かすものとして，本単元では，吹き出しや感想が書かれた作品をその都度掲示して相互に評価を行うようにした。さらに，今後は学習時間内においても相互評価の場を設定するような工夫をしていきたい。

3　一人一人がめあてをもって読み進め、自分の考えを広げる学習活動の工夫（第４学年）

(1)　単元名　「わたしの『一つの花』ノートを作って友達と読み合おう」

(2)　教材名　一つの花

(3)　研究主題との関連

本単元では，学習過程にそって以下の３点から支援の工夫をし，主題に迫りたいと考えた。

①　学習のめあてを作る段階では，「一つの花ノートを作ろう」を児童に提示した。学習が終わった時のまとめの姿がイメージしやすいことから，目的意識が明確になり，学習に対する見通しが持てるようになると考えたからである。

②　自分の考えを持ち広げる段階では，学習方法の選択と学習形態の工夫を図った。２単位時間の前半では，自分の考えをもつために一人学習の時間を取り入れた。キーワードを押さえるための方法として，心情曲線や書き込みを提示した。後半では，読み取った内容を表現する時に，吹き出し・日記・手紙の３種から選択させるようにした。児童の興味・関心に応じ，豊かな個の読みを引き出して育てていくための方法として，効果が期待できるからである。また，読みの交流の場を持ったのは，互いに意見を取り入れることで考えを広げられるからである。

③　相互評価・自己評価を取り入れ，児童が学習を振り返ることにより，次の学習への意欲を高め，学び方を身に付けられるようにした。

(4)　学習計画の概要（全11時間・本時８～９／11）

学　習　活　動	自分の考えを広げるための支援
○全文を読み，初発の感想を書く。 ○学習のめあてを作る。	・作品に出会った時の興味・関心を生かす。 ・初発の感想を分析し，個に応じた支援計画を立てる。
わたしの『一つの花』ノートを作って，友達と読み合おう。	
○学習計画を立てる。 場面ごとの学習課題を作る。 時代背景をつかむ。	・既習の学習の流れを提示する。 ・インタビューの仕方，依頼の手紙の書き方の手引きを用意する。
○自分の選んだ学習方法で場面ごとの登場人物の様子や心情を読み深める。	・学習方法についての手引きを用意する。 （吹き出し・日記・手紙） ・読みを交流する場を設定する。
○「一つの花ノート」のあとがきを書く。 ○ノートを読み合い，一言感想を書く。	・振り返りの観点を示す。 ・友達への紹介のページとなるようにする。

(5) 展開（8～9／11）

① 目標

一輪のコスモスをゆみ子に託し，何も言わずに汽車に乗ってしまったお父さんの気持ちを想像し，日記・吹き出し・手紙の中から方法を選択して，自分の読みを深める。

② 展開

学　習　活　動	自分の考えを広げるための支援（○）と評価（●）
1. 本時のめあてをつかむ。	
一輪のコスモスをゆみ子にわたした時のお父さんの気持ちを想像しよう。	
2. 本時の学習範囲を読む。 3. お父さんの気持ちの表れている言葉を見つけ，自分の考えを書く。 （前半）	●心のグラフや書き込みなどの方法を選び，父の言動に対する自分の思いが書けたか。 ○一つの方法が終わった児童には別の方法に取り組むよう促す。 ○キーワードが見つけられない児童は，サイドラインを引いたヒントカードを使って書き抜きをし，書き込みができるようにする。
4. お父さんの気持ちについて，自分の考えをもとに話し合う。 ・グループで話し合う。 5. 自己選択した方法で，読み取ったことを表現する。	○焦点化された語句をもとに話し合う。 ●同じ学習の方法をとる児童のグループで意見交換することができたか。 ●吹き出し・手紙・日記の中から選択し，父親の気持ちを想像して書くことができたか。 ○一つの表現方法が終わったら，同じ方法で立場を変えて書くよう助言する。 ○なかなか書き出せない児童に，書き出し文を書いたヒントカードを与える。
6. いろいろな方法で書いた内容を聞き合いお父さんの気持ちを読み深める。	●自分の考えと友達の考えで似ているところや違っているところに気付き，自分の読みを見直すことができたか。
7. 学習感想を書き，自己評価をする。 （後半）	○自己評価をし，次への意欲につなげる。

(6) 考察

① 内発的な学習意欲を生かす単元構成の工夫

学習の見通し 「わたしの『一つの花』ノートを作り，友達と読み合おう」という終末の活動をイメージすることで，児童は目的意識や相手意識をもつことができた。また，『一つの花』ノートの内容をどのようにするか考えることにより，場面ごとの課題設定や時代背景について調べたりする学習の必然性が生まれた。その結果，どの児童も学習の見通しを持ち，意欲的に学習をすることができるようになった。また，自分だけのノートができあがることも大きな魅力であり，意欲の持続につながった。

学習方法・学習形態 課題にそって文章を読む過程で，自分の考えをもち，広げるためには，個に応じた支援を計画的に行い，一人一人の個性を生かす学習方法を選択させる必要がある。書き込みをする，心情曲線に表すという学習方法で，どの児童も手がかりとなる語句を見つけたが，一人学習の時間を確保した効果だと考える。自分の好きな表現方法を選び，想像したことをまとめたが，児童は，物語の世界に浸ることができた。児童が作ったノートのあとがきには，「サイドラインを引いて書き込むだけでなく，書き抜きをするのもいいと思う。」とか，「私は，日記や手紙などで登場人物になりきって書くのが得意になった。」などの感想があった。児童が文章を読むための方法を知り，満足感・成就感をもったことが分かる。さらに，意見交流することは，自分と友達との読みの違いに気付き，よさを取り入れていくことにつながった。グループ作りの方法については今後の課題として残った。

② 児童理解の工夫と評価の生かし方

学習の振り返り 終末では，できあがったノートを互いに読み合い，読みや学習方法の違いについて発見したことを書いた。自分のよさを友達に認められた喜びは大きかった。また，自己評価の方法として「わたしが主役」カードに，毎時間，学習課題・達成度・次にがんばりたいことなどを記入した。必ず教師からの一言を添え，一人一人の努力やよさを認め励ますよう心がけた。そのことで，児童は次の学習への意欲をもち，教師は児童の傾向や課題を把握することができた。今後も振り返りを重視し，学ぶ態度を育てていきたい。

個に応じた支援計画 児童一人一人に適切な支援を行うことが主体的な読み手を育てることであると考え，学習状況一覧表を作成した。達成目標・評価内容・学習方法・評価規準を組み入れ，個に応じた支援計画を立てた。このことは，一人学習の時に課題に向かって学習していく児童を育てることに効果があった。児童の学習状況に対して共感的理解ができるのも，このような実態の把握があるからこそであると考える。

4　一人一人がめあてをもって読み進め、自分の考えを深める学習活動の工夫（第５学年）

(1)　単元名　「○○小学校に朗読カセットブックを送ろう」

(2)　教材名　麦畑

(3)　研究主題との関連

自らめあてをもって学習に取り組むことやこれまで身に付けた基礎基本の力を駆使して自力でめあてを達成することは，主体的な学習を成立させる重要な要素である。本分科会では，こうした「主体的な学習の仕方」を身に付けた児童を育成するために，「単元構成の工夫」「児童理解の工夫と評価」について追究していきたいと考えた。

本単元の学習のめあて（終末の活動）は，「○○小学校に朗読カセットブックを送ろう」である。「○○小学校に送る」ということから相手意識が生まれ，「いい朗読テープを作りたい」という思いや願いから目的意識・読みの必然性が生まれる。また，その必然性に支えられて児童は，自らの読みのめあて＝学習課題を意欲的に見つけることができると考えられる。児童の「自ら読み進める意欲」を喚起・持続させるためには，学習活動や学習形態の多様化・弾力化を図りながら単元構成を工夫すること，児童一人一人の願いや課題にそった支援の方策を具体化することが大切であると考え，研究を進めてきた。

(4)　学習計画の概要（全15時間・本時６／15）

学　習　活　動	考えを深めるための支援
○文題を考えて全文を読み，初発の感想を書く。 ○感想をもとにして話し合い，学習のめあてをもつ。 ○○小学校に朗読カセットブックを送ろう。	・全員の感想を印刷して配布し，その内容をもとにして話し合うようにする。 ・相手・目的を明確にして意欲付けを図る。
○情景の描写を味わいながら読む。 ○ハリネズミたちの自然に対するものの見方や考え方，人間に対する思いをつかむ。 ○読み取ったことをもとにして工夫して朗読する。	・学習ノート（朗読台本）の書き方を全員が分かるように，ていねいに指導する。 ・手がかりとなる言葉に即して想像するように助言する。 ・学習状況に応じたヒントカードを用意する。
○役割を分担して，朗読練習をする。 ○朗読解説書を作る。 ○テープに吹き込み相手に送る。	・「○○小学校の友達」が聞いたり読んだりすることを常に意識できるように励まして助言する。 ・録音機器・活動の場を保障する。

(5) 展開（6／15）

① 目標

ハリネズミとジャックじいさんの言動をイメージ豊かに読み，二人のものの感じ方・考え方に気付く。

② 展開

学　習　活　動	自分の考えを深めるための支援（○）と評価（●）
1．全体の学習のめあてと自分の学習課題を確認する。	○自分が解決したい課題を明確にし，自力で学習を進めようとする意欲を高めるようにする。
2．音読し，朗読の台本作りをする。	○「個に応じた支援計画」を作成し活用する。
・学習範囲を音読する。 （P87ℓ5～P89ℓ2）	●学習範囲をつかみ，正しく音読できたか。
・めあてを解決するための大事な言葉にサイドラインを引き，自分の考えを書き込む。	○言葉に着目できない児童や書き出せない児童には個の課題に立ち返るよう助言したり，ヒントカードを渡したりする。 ○友達と意見を交流したい箇所には印を付けておくよう助言する。 ●手がかりとなる言葉に着目し，自分の考えを書き込むことができたか。
3．台本に書き込んだ内容についてグループで話し合い，それを生かして朗読練習をする。	○グループで解明できない課題については，全体に提起して話し合うよう助言する。 ●意欲的に自分の考えを話すことができたか。 ●工夫の視点を明らかにして朗読できたか。
4．ノートに今日の学習のまとめをする。	○感想に書かれた内容を共感的に理解し，次時の学習に生かすようにする。

(6) 考察

① 内発的な学習意欲を生かす単元構成の工夫

学習のめあて・学習課題づくり　本単元の学習のめあて「○○小学校に朗読カセットブックを送ろう」は，児童の実態（興味・関心）をとらえて教師が提案したものである。児童はこの投げかけに目を輝かせてとびついた。興味関心が生かされ相手意識が明確になったことで，学習への構えが意欲的になったものと考えられる。「いい朗読カセットブックを作るためには，どんな学習をしていけばいいですか。」との発問に，児童は，「情景や人物の気持ちを詳しく読み取ることが必要だと思う。」と答えた。これは，児童が自ら読みのめあて＝学習課題を引き出したことになる。「情景を思い描きながら読もう」「生き物たちの気持ちを考えながら読もう」を学級全体の共通課題としながら，場面ごとにより具体的な個の学習課題を作り学習を進めた。

15時間に及ぶ単元学習であったが，児童の意欲や集中力は途中でとぎれることがなかった。いい朗読テープを作って送り，喜んでもらいたい……という願いや思いがあり，何のために読むのかという必然性があったからにほかならない。教師が一方的に与える学習のめあて・学習課題ではなく，児童が自ら学ぶための学習のめあて・学習課題づくりを更に追究していきたいと考える。

学習活動・学習形態　自らの疑問や課題を自力で解決するために，自分で考えたり，調べたり，判断したり，表現したりする活動を重視してきた。今後は，更に多様な学習活動を経験させながら学習課題追究のために自らその方法や学習形態を選択できるよう協力的な指導を積み重ねていきたいと考えている。

② 児童理解の工夫と評価の生かし方

児童一人一人のよさや可能性・願いや思いを的確につかむことが大切である。本単元では，その考えを具体化するために「個に応じた支援計画」を作成した。「個の学習課題」と「支援の方策」を盛りこんだものである。児童一人一人がそれぞれ異なる課題・学習活動・学習速度で学習を展開するとき，その対応はなかなか困難を極める。しかし，児童の側に立った支援が適切であればあるほど，児童の興味・意欲・態度は更に深まり，主体的な学習の仕方も身に付いていくことを実感した。学習過程における支援と評価の一体化を図りながら，長期的な児童の変容（興味・関心・意欲，学習状況，成就感・満足感など）を把握して，よりよい「個に応じた支援計画」づくりを目指したいと考える。

5　一人一人が作品に自らかかわって読み進める学習活動の工夫（第６学年）

(1)　単元名　「夢はどのようにえがかれるのか」

(2)　教材名　風の強い日　他

(3)　研究主題との関連

高学年Ａ分科会では，一人一人の児童が作品（＝教材）に深くかかわることができた時，次のような読みの姿があらわれるととらえた。

① 作品の言葉を受けて豊かなイメージをつくり上げる。
② 自分の経験と作品の言葉から，自分にとっての新たな意味を発見する。
③ 作品に感動する。作品を批評する。
④ 作品を読むことを通して自己の生き方を見つめる。

上記のような観点で児童の読みを評価し，児童一人一人が主体的に学ぶことを支援するために，本実践では次の点を重点的に追究した。

① 単元構成を工夫すること
② 児童が意欲的に取り組めるような授業設計を行うこと
③ 児童の個性を生かす学習方法を工夫すること

(4)　学習計画の概要（全19時間・本時11／19）

学　習　活　動	一人一人が自ら作品にかかわって読み進めるための支援
○全文を通読し，最初の感想文を書く。 ○感想を紹介し合い，単元全体のめあてをもつ。	・期待する読みを上記の四つの観点で評価し，更に深く作品にかかわることができるように単元計画を見直す。 ・一読後の感想文の一覧表を資料として配布し読みの傾向を踏まえてめあてづくりをする。
『夢はどのようにえがかれるのか』というテーマで表現発表会をしよう。	
○グループ別に表現活動を行い，中間発表会で相互に批評し合う。 ○表現発表会を行う。 ○新出漢字，難語句等のまとめをする。	・根拠を叙述に求めるように話し合いをさせる。 ・中間発表の時の学習がどのように生かされているかという観点で評価する。 ・基本的な言語事項は確実に押さえる。

(5) 展開（11／19）

① 目標

・ 本時の課題をもとにクジラの姿をイメージ豊かに読む。

・ 友達の読みを参考にして，自分の読みを見つめ直す。

② 展開

学　習　活　動	自ら作品にかかわって読み進めるための支援（○）と評価（●）
1．グループに分かれて表現活動を行う。 （紙芝居，劇，人形劇等の手法で朗読のグループ学習を行う。）	○特に注意して読みを評価したい児童の活動の様子を中心に観察し，本時の展開に生かすようにする。 ●学習課題に対する自分なりの考えをもっているかどうかを把握する。
2．本時の学習課題について話し合う。	
「私達は，クジラのこういう所が好き」という話題で考えを話し合おう。	
・ユーモラスなクジラの姿が好き ・夢に対する一生懸命さが好き ↓ では，『ぼく』はクジラに対してどのような気持ちをもったのだろう。 ↓ きっと私達と同じ気持ちをもっただろう。 ↓ では，クジラの姿を生き生きと表現しよう。	●一人一人の児童の発言がどのような意味を持っているのかその真意をとらえ，友達のどの意見とかかわりがあるのかが明確になるように板書する。 ○話し合いは児童の相互指名を原則とするが必要と判断した場合には，授業者が意図的に指名し，話し合いの活性化を図る。 ○叙述に即してイメージしたクジラ像を語らせるようにする。必要に応じて「どの言葉からそう思ったか」を問いかける。
3．学習感想を書く。	○本時の学習に対する自己評価であることと同時に次時の学習をつくる大切な資料になることを意識して書けるように配慮する。 ●発言の無かった児童の考えを把握し，本時の教師側の評価のための資料として生かす。

(6) 考察

① 単元構成を工夫すること

本実践の単元では「『夢はどのようにえがかれるのか』というテーマで表現発表会をしたい。」という児童の願いを学習のめあてとした。終末の活動像が明確であったため，児童は見通しを持って学習し，主体的に読み合うという活動につながった。

単一の教材ではなく，児童が自ら選択した文学作品をも教材として取り入れたこともあり，19時間の大単元となった。教師は，年間指導計画を精選し，重点をかけて本単元を構成したが，どのように時間数を確保していくかについては今後の課題である。

② 児童が意欲的に取り組めるような授業設計を行うこと

児童の側に立った学習をつくりあげるために，本実践では一単位時間の終末に，学習感想を書くことによる自己評価の活動を必ず取り入れた。そしてその学習感想をもとに，多面的・共感的に児童の学習状況を評価することから次の時間の授業設計を行うようにした。

具体的には，一人一人の前時までの評価と「本時には，こんな力をつけてほしい」という願いを座席表に書き込み，授業設計のための資料としたのである。

このような教師の準備は，適切な支援を行ううえで有効であった。本時の話し合い活動は児童の相互指名を基本としていたが，教師は一人一人の読みの実態を十分把握しており，読みの交流を活性化するために必要な助言を行っていた。そのため児童は意欲的に読みを交流し，本時の終末段階では，次時の学習課題『クジラに対するぼくの気持ちを考えよう』を自分達の力でつくりあげることができた。

座席表を利用した資料のほかにも，児童の側に立った授業設計のための手だてを今後も探っていきたい。

③ 児童の個性を生かす学習方法を工夫すること

本実践では，児童の表現方法（学習方法）を一つに統一することはせずに，劇・人形劇・紙芝居等の様々な表現方法から自由に選択させた。その結果，児童は実に意欲的に教材文を読み合った。そして教師が特に指示しなくても，『場面構成を考える』『朗読の練習をする』『場面の情景を想像する』などの学習を自ら進んで行うことができた。児童の自らの個性を生かした取り組みを授業の中で保障した成果であると考えている。

高学年の段階では，本実践のように児童自らが個性に合った学習方法を選ぶことのできる力を育てたい。そのためには様々な学習方法のよさを児童が経験していることが大切になってくる。発達段階に応じた学習方法の経験のさせ方を考えていきたい。

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

1　成果

○　児童一人一人に対する共感的な理解をもとに児童の側に立った支援を行った結果，児童は学習の仕方を身に付け，自分の思いや願いを実現する読みができるようになった。

○　学習のめあてや多様な学習活動を取り入れたことは，児童の学習意欲を喚起させ，学ぶ楽しさや成就感を味わわせるうえで有効であった。

2　課題

○　主体的な学習につながる自己評価や相互評価，個を生かす支援の在り方，個に応じた多様な学習活動について更に解明し，実践を重ねていく必要がある。

なお，各分科会の成果及び課題は，以下の通りである。

低学年　個の読みを生かして「学習のめあて」を作り，個に応じた多様な学習活動を体験させたことにより，意欲的に楽しく読み合う姿が見られるようになった。また，教師が個別の支援計画をもとに，即時的な支援や評価を繰り返すことにより，読みの力が育ってきている。今後は相互評価や自己評価の工夫，個に応じた表現活動の開発を図る必要がある。

中学年Ａ　意欲を大切にした「学習のめあて」作りをすることにより，児童が学習の見通しを持って楽しく学ぶことができ，意欲の持続が図れた。また，座席表を利用した支援計画を立て，毎時間の学習の中で個に応じて児童を認め励ますことで，次時への意欲付けができた。更に，主体的な読み手としての自己評価・相互評価の在り方を深めていきたいと考える。

中学年Ｂ　終末の活動に向かって学習したことを自分なりのノートを作ってまとめていったことは，児童が自分の読みや学習方法を振り返り，次の学習への見通しを持つために有効であった。児童が既習の方法を生かし自らの力で作品とかかわるためには，教師の適切な支援が重要であることから，児童の思いや願い，学習状況を把握するための手立てを更に追究したい。

高学年Ａ　児童が追求したいことを学習のめあてとし，表現方法を自由に選択させたことは読む意欲を引き出した。一人一人の学習状況をとらえ，育てたい力を明確にした支援計画により適切な支援ができ，読みの交流を活性化した。また，自力で学習課題を設定し解決することにもつながった。更に，児童の願いと教師のねらいが一致した単元構成の工夫が課題である。

高学年Ｂ　単元全体を見通した学習のめあて作りは，児童の内発的な学習意欲を喚起し，主体的に学ぶ態度を育てていることを実感する。また，学習活動や学習形態の工夫により，児童は学び方を身に付けながら読む力も付けてきている。今後も，児童の思いや願いを生かしながら確かな言語能力を付け，考えを深めていくための支援の在り方を追究していきたい。